

ふらのみらいらぼ
ふりかえり帖
2021



はじめに

私たちは、年齢や立場を越えて、みんなでアイディアを出し合い自ら実践するワークショップを行っています。合言葉は、「まぜて、まなぶ」です。多世代の仲間が、互いの知恵や知識を貸し借りしながら交流する中で、富良野が「好き」、富良野を「大切にしたい」と、「このまちに住んでよかった」という心を育むことを目指しています。

活動を始めて6年目の今年は、主に2つのプログラムを展開し、112名の方が登録しています。新型コロナウイルスの影響により、「まぜて、まなぶ」実践が難しい状況でしたが、ワークショップの期日をずらしたり、オンラインを取り入れたりしながら活動をすすめました。

私たちの活動をより多くの方に知っていただくために、2021年の活動をふり返る冊子を作成しました。たくさんのアイディアを寄せて、実践したワークショップの軌跡をぜひご覧ください。

もくじ

はじめに	
土・ひと・アート 2021 大地見聞	4
土を知る	6
土にふれる	8
土と写真	10
土と絵画・造形 1	12
土と絵画・造形 2	14
交流・ひと	16
みんなの声	17
はたらく人になって 2021 ICT エンジニア	18
特別ワークショップ 気候変動に向き合う	20
ふらのみらいらば年表	22
おわりに	

*今年度予定していたプログラム「見て作って食べて おいしいを探そう」「サウন্ズ&ムービーズ ふらのを伝える」は、新型コロナウイルス感染防止のため実施を見送りました。

土・ひと・アート 大地見聞

足元の土、野山の土、田や畑の土、富良野の土のこと、どれくらい知っていますか？今年は、身近な「土」に着目し、土の基本を学び、土を探して、土に触れる体験をしました。その時のひらめきや感動を、「写真」「絵画」

「造形」などで表現し、幼稚園児から80歳代まで多世代の参加による109点のアート作品展に仕上げました。作品展は新型コロナの影響で3日間でしたが、作品は市のホームページでも公開しました。

土を知る



身近な「土」について学ぶ

2021年4月24日

今年度初のワークショップはオンライン開催でした。「土」の専門家 岩見沢農業高校教諭の佐々木章晴さんを講師に迎え、「土」についての基礎を教えてくださいました。小学生から70代までのメンバー35名が参加。「土」の成り立ち等をスライドで学び、実験を織り交ぜながら「土」が水を浄化させる働きがあることなどを学びました。

みかみ ちかの ある日の会話



「先生の話聞いて、とにかく『土』ってすごい！と思ったわ。『土』がないと陸のすべての生き物は生きていけないんだものね。やちこさんは、どんなことを感じた？」

「『土』があるおかげできれいな水ができるし、食べ物ができるってことがよくわかりました。」

「実験も面白かったわね。『土』と水を試験管に入れてよく振って、しばらくおくと2層に分かれているの。『土』は、砂と粘土からできているってことを実感したわ。」

「そうですね。もう一つの実験も興味深かったです。『土』と砂にアンモニア水を通したら、『土』に通した方が色が薄くなってました。『土』がアンモニアを吸着して水をきれいにすることがわかりましたね。」

「どおりで『土』の中を通っている湧き水や溪流の水がきれいなはずだわ。」

「土」ってどのようにできたの？どんな役割があるの？身近な「土」を紐解くと、知りたいことがいっぱい。「土」の達人にお話を聞いて、「土」を掘って、「土」から生き物を探して、「土」で作品を作って・・・いろいろな角度から「土」に触れてみました。

「今回、『腐植酸(ふしょくさん)』という言葉初めて知りました。草や落ち葉・堆肥が土壌生物に食べられて『腐植酸』になるそうです。『腐植酸』が多いと黒くなり、栄養豊かな土になるのだそうですね。」

「『腐植酸』を『土』から分離する実験もしてくれたよね。黒っぽい水だった。それから、『土』ができる速度にも驚いたわ。岩がくずれて『土』になるのに、1年間でたったの0.1ミリしかできない！って。10年で1ミリ、100年でやっと1センチ。すごく時間がかかるのね。」

「私は家庭菜園の畑起こしで30センチくらい耕しているけど、3000年かかってできた『土』を今使わせてもらってるんだなと思いましたよ。『土』が今年の私たちのテーマ『川』につながったことも印象的でした。岩石のミネラルが『土』になり、生物が利用し、川から海へ流れ、海のプランクトンが利用するっていう。」

「黒い『土』が大量に二酸化炭素を蓄えている話もあったね。木が二酸化炭素を蓄えているのは知っていたけれど、『土』も蓄えてるとは。」

「『土』はあって当たり前だったけれど、『土よ、ありがとう』って思います。」

土にふれる

「土」

土壌について話を聞き
地中の生き物を観察した
そこは多種多様な小さな虫たちの世界が
あり各々の生への営みがある
そのどれもが
豊かな実りの基となることを知る
関わった各所の土(壤)を集めてみると
色も臭いも役割も違う
この当たり前にあると思っている
水や土や空気も
私たち一人一人が大切に守らないと
失われるものと知る
大地見聞多くを知る



まもなく新庁舎の下に眠る「土」を掘るメモリアル・イベント
2020年12月19日



種をまく



水をやる



花が咲く



種をとる



土に返す

「土」の中の生き物を探す① 2021年5月22日

新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言発令により、屋外活動を延期し今回はオンラインで開催しました。今回の主役は、講師お手製の「ツルグレン装置」。ペットボトルの中の「土」に光を当てると、小さな生き物が下に設置したシャーレに落ちてくる仕組みです。取り出した生き物たちや図鑑を画面越しに眺めながら、「土」の中の世界を想像し、次回の屋外活動に期待をふくらませました。



「土」を掘る・ふれる 2021年6月26日

今年度初の屋外活動はお天気に恵まれ、絶好の「土」掘り日和でした。今回は、布部小中学校の敷地をお借りして「土にふれよう、土を掘ろう」という企画。約40名の参加者が3つのチームに分かれ、ズバリ「土」を掘る体験をしました。身近ではあるけれど、じっくり触れる機会がない「土」。その「手触り」や「匂い」…新鮮な発見がありました！最後に、ひまわりの種をまいて水をやり、夏の開花を楽しみに畑を後にしました。



「土」の中の生き物を探す② 2021年7月17日

布部小中学校を再び訪ねました。敷地内の林の中、枯れ葉が積もった場所を掘ると、「腐葉土」の層が出てきて、葉っぱが崩れて堆肥になる様子を見ることができます。その「土」から小さな生き物がたくさん見つかり、顕微鏡で観察。「土」の中には個性豊かな生物がいるということを体感しました。中でも「カニムシ」が大人気！後半は、屋外で写真撮影のレクチャーを受けたり、前回種をまいた「ひまわり」に水をやりました。



土と写真

写真班は富良野高校と緑峰高校の両写真部、一般の方々から 59 点もの作品を寄せていただいた。全員必ず 1 点以上という条件で、厳選した 43 点を展示した。

新型コロナウイルスに振り回された今年は「これまでワークショップに参加できていなくても作品があれば出して下さい」とお願いした。1 回でも参加して趣旨や気持ちを共有するのが例年のやり方だが、そこに固執しないという判断をした。

遠くの人から手紙が届くように、土を切り口にした写真と解説文が届いた。時間を割いて撮ってくれたこと、届けてくれたことに感謝の気持ちでいっぱいだった。

「土」はおそらく難しいテーマだったのではないかな。

土からできる農作物なしでは私たちの暮らしは成り立たないのに、普段、土そのものを撮ることは少ない。空気もそう。息ができないと短時間で命に関わるのに、透明な存在のみでは被写体になりづらい。

それでも様々な被写体の作品が集まった。土そのもの。土に触れる子ども。畑で絵を描く人たち。広大な畑。休むハクチョウ。農作業。花。草。野菜。猫。動物園の狼。バッタ。カニムシ。

撮るときはカメラのレンズを操作してピントを合わせる。同時進行する作業がもうひとつあって、自分の気持ちや表現のポイント、つまり心の中にピントを合わせる。

カメラの操作は練習で必ず上手になる。やっかいなのは心のピントの方。あっという間に過ぎる現実のなかで、心のピントが合っていないままにシャッターを切る。何を撮ったか分からない写真になることもあれば、迷いや気持ちの若さがそのままときめく写真になることもある。

青春の真ん中で心のピントを探しているような高校生の瑞々しい写真。風景や子どもたちに愛おしいピントを合わせた大人の写真。みんなで作った展示からは、たしかに土の匂いがしていた。



カニムシ

文・写真 / 写真家 石黒 誠

写真制作のあゆみ

写生会や屋外ワークショップの際には、カメラの機能の使い方や、自然・風景の撮り方を、講師の石黒誠さんに教えていただきました。室内で行ったワークショップでは、主に人物の撮り方を学びました。作品展の直前には、各自のベストショットをパネルに貼る作業を行い、会場の展示作業では、新型コロナ緊急事態宣言中だったため講師と事務局で行いました。その様子を動画にして配信し、出品者が共有でき好評でした。



土と絵画・造形 I

面 - わたしはここにいる -

作品は「自分」
その作品が私を凝視する
何とまあ 進歩のない「自分」と
再会したことが
真面目さを 大事に 精進してきた
ここに至ってもう少し もう少しだけ
ずっとけてもいいのでは
その勇気を持ちたい
見えなかったものが見えてくる
環境や 方向性の 齟齬による 素材への抵抗
地元の土を 混ぜて 多くを学んだ

強い日差しのもとで

採取した土の天日干し
南富良野・布部
そして旧市役所庁舎の土

オリジナリティ

古い田んぼの粘土と
市販の粘土を練り込む
むかしむかしの
富良野の匂いがする

ていねいに

生きものを思い描いて形に
見たことあるような
ないような

炭火で焼しめ

粘土で作った生きものたち
七輪での焼成に挑戦
輪になって着火を見守る

十人十面

おだやかな深いしわ
顔のパーツづくり
粘土に触れて味わう
非日常感

500℃で焼成

生涯学習センターの窯へ
並んだ面たちは
どこかうれしそう

造形制作のあゆみ

前年の12月に富良野市役所庁舎建替え工事現場で、土を採取するところからスタート。5月には、富良野の田んぼの粘土を手に入れ、焼き物用の粘土と混ぜて使い、土の中の生き物たちを作るワークショップを行いました。さらに7月のお面作りワークショップでは個性豊かな粘土作品ができました。これらは七輪や生涯学習センターの窯で焼成。そして架空の生き物やモチーフをたくさん造り、展示会場に3つの地面と3本の柱を設置しました。多くの人達の手で創り上げた共同作品は、不思議なパワーあふれる作品となりました。

わたしはここにいる

「面って怖くない？」
と耳にした
そうだ！
ポップな感じに
配置してみよう！

見たことのない

架空の生きものたちを
「可能性の柱」に
みんなで掛けたら
「空」につながった



土と絵画・造形 2

写生会

7月の高原は 風が涼しく光るところ
幾重にも 連なる耕地
先人達の 息遣いが 聞える
この風景を あるがままに
忠実に 写し取ることで
その思いを感じる
ぼんやりとした 不安の中にあっても
今 この地表に 立つと
何があっても 私は 大丈夫という確信
この 雄大な 自然は 私のもの

広～い！

どこでどの景色を
自分は描きたいか
のんびり歩きながら
探してみる

見つけ！

ここはいい場所
気に入った
雄大な景色を
ひとり占め

カラスアゲハ発見

さっそく作品モデルに採用
広い小麦畑のアクセントに

さらさら、すいすい

大きな画用紙と筆さきに
思いを集中
一生懸命描いて
時間内に仕上げるぞ！

深みが増してゆく

後日の仕上げのがんばりで
あの日の光景が
よみがえる

貴重なアドバイス

講師との対話
気づきとひらめきが
筆に伝わり
描き込みがどんどん進む

オリジナル額縁づくり

道端の草を枠において
上から着色
どのように仕上がるか
スリル満点でドキドキ

展示も学び

ひとつひとつ大切な作品
そっと集中して水平に
全体のバランスも見て
気分も高まってゆく

写生会 2021年7月3日

南富良野町北落合にある「おさだ高原農場」の広大なフィールドをお借りして開催。遠くまで広がる畑の景色、穏やかな日差し、気持ちの良い風、すばらしい環境で絵を描くことができました。自分が描きたい場所をさっそく見つけてスラスラ筆が動く人、描く対象をじっくり探してまずはデッサンから始める人、思い思いに描く時間を過ごしました。

絵画制作のあゆみ

写生会当日に絵を仕上げる人や、テーマに沿って改めて作品を作り始める人、それぞれの思いで取り組みました。夏休みには集中制作期間を設け、額縁は段ボールでスタッフが枠だけを作って準備し、本人が自分の絵に合わせて色塗りなどして完成させました。

交流・ひと



「ろう文化」との出会い

富良野市在住の並木淳氏が、暮らしステーションで「ろう文化」と手話にまつわるワークショップを開催したことがきっかけで、友人のろう者の画家乗富秀人氏の作品を展示させていただきました。ご本人が以前北海道に住んでいた縁もあり、並木氏は「ろう文化と手話へのご理解と、奥深いろう者の心持を作品を通じて感じていただければ幸いです。」と、私たちと遠く熊本に住む乗富氏をつないでくれました。

ここで始まる・ここでつながる

大学生との出会い

同志社女子大学 現代社会学部システム学科（天野太郎教授）の学生が、プロジェクト演習で富良野を訪れるようになって16年。授業の中の「地域交流」という位置づけで、19名の学生が7チームに分かれ、作品を寄せてくれました。豊かな土壌で育ったぶどうを使用した「ふらのワイン」のオリジナル・ラベルを考えたり、学生と縁が深い地域の「土」を調査し特徴を紹介したうえで、その土地の「土絵の具」で名所を描き発表してくれました。コロナ禍で今年度の富良野訪問は中止となりましたが、作品展の会期終盤にはオンラインでワークショップを行い、富良野の参加者と京都の学生が画面越しに交流することができました。



みんなの声

各ワークショップにおいて参加者のみなさんから多くの声をいただきました。一部をご紹介します。

Q. どんなことが楽しかったですか？

- ・土のことなんて考えたこともなかったので、改めていつも身近にある土のことに興味を持つことができました。(50代女性)
- ・土に興味があったので。昨年の川の内容とつながったこと。(60代女性)
- ・実験が面白かった。(中学生男子)
- ・普段見ることのない虫の生態を知れたこと。親子でわいわい粘土ができたこと。(30代女性)
- ・土をこねこねしたこと。(小学生女子)
- ・粘土を触るのなんて久々でとても楽しかった！(40代女性)
- ・もぐらちゃんをかわいく作れたこと。(小学生女子)
- ・ひまわりのたね植え。(保育園女子)
- ・泥団子作り。(小学生男子)
- ・土を掘るのが楽しかった。(小学生男子)
- ・とにかく、土を無心で掘って埋め戻す……。無になれました！(40代女性)
- ・絵を描く場所探し。(小学生男子)
- ・北落合の雄大な景色。(70代男性)
- ・何人かで相談しながら撮影できたこと。石黒さんにカメラの機能の使い方などを教えていただき撮影できたこと。(50代男性)
- ・ワラジムシ、トビムシ、クモ、ダニ。なんといってもカニムシがすごかった。(70代女性)
- ・虫がいたこと。土の中にいっぱいいたこと。(小学生女子)
- ・自分達で採った土の中の虫たちを顕微鏡で見れたこと。(40代女性)
- ・けんぴ鏡をのぞいたこと。(小学生男子)
- ・いろんな人と交流できたし、自分のお面を作るというところ。(中学生女子)

Q. 今後取り組んでみたいことは何ですか？

- ・思い切り屋外で活動しながらお昼ご飯を食べて交流したい。また、富良野の自然を感じられる体験をしたい。(30代女性)
- ・昼や夜に皆さんと寝転んで空を眺めてみたい。(60代女性)
- ・これまでの「森に分け入る」「川に近づく」「土に触れる」などを繰り返したい。(70代女性)
- ・りょうり。(小学生女子)
- ・細菌の世界（発酵含む）。(小学生男子)

はたらく人になって 2021 ICT エンジニア

はじめてのプログラミング

これまでほとんどパソコンにふれたことのない小学校低学年を対象に、また、新型コロナウイルス感染症対策として、参加者を少人数に制限して開催しました。教材として使用したのは「Scratch（無料で使用できるプログラミング言語）」。

簡単な入力とマウス操作で、ブロックをつなぎ合わせながらプログラムを組み立てるのが特徴。プログラミング初心者子どもたちがパソコン操作に慣れることと、プログラミングの初歩を体験しました。U-16 プログラミング・コンテストに出場した中学生メンバーによるサポートを受けながら、プログラミングにチャレンジしたい！という熱意をもった親子のみなさんが参加してくれました。



仲間とともに技術を磨く

U-16 旭川プログラミング・コンテスト（兼北海道大会）に向けて夏から仲間たちと共に練習を重ねてきました。大会は新型コロナウイルス感染症の影響によりオンライン開催ではありましたが、暮しステーション2階で参加選手とその応援者が一緒に観戦しました。選手は自分のプログラムが思い通りに動いてくれるかドキドキしながら、応援者はそのプログラムの動きに一喜一憂しながらの観戦です。ふらのみらいらばからは8名の内5名が決勝リーグに進みましたが、惜しくも入賞は逃してしまいました。悔しい思いをした皆さん、また来年もコツコツ仕上げていきましょう。

ふらのにはどんな会社があって、大人がどんな仕事をしているかを知っていますか？昨年度に続き ICT エンジニアを目指して論理的思考とコミュニケーション能力をアップ。仲間や先輩とプログラミングの技術をみがいています。

■どんなことが印象に残りましたか？

ねこをうごかすのがすごかった。(小2・男子) / PC の使い方が少し身につきました。(30代・男性) / 子供が積極的にすすめて、楽しそうにしており、同い年の子に話しかけて楽しそうでした。(30代・女性) / プログラミングのイメージがわかった。どのように発展していくのか楽しみです。ついていけるかな。(苦笑)(50代・女性) / 上には上がいること。(中1・男子) / 自分が作ったプログラムで戦ったこと。(高1・男子) / 今年は、新しくプロコンに参加してくれることになった方々にアドバイスする機会が多かったのですが、それがきっかけで、自分のプログラムの構造をもう一度見直しました。基本に戻ってプログラムを書いてみると、見えてくる部分もあって面白かったです！そんなことは言いつつも、一番印象に残っているのは切断してしまったシーンです…。来年は今年作り切れなかった部分の加筆をし、切断しないことを徹底して決勝で戦えるようにします！(中2・男子) / 子供の興味がすごかったところ(40代・女性) / ケラケラ笑いながら楽しんでいる様子でした。プログラミングも遊びの一つだなと感じました。(40代・女性) / プログラミングって何のことが全くわかっていませんでしたが、少し雰囲気わかりました。(40代・女性)

■感想や改善点があれば記入ください。

どのような命令があり、それぞれの命令によりどのような動きを示すのか、わかりやすいリファレンスを作ると良いと思います。また、単純で基本的な動きのサンプルがいくつかあると良いと思います。(50代・男性) / 来年もまた頑張りたいです(中1・男子) / 暮しステーションに集まって作業する時間がもうちょっとあったらいいなあと思います。早い段階で活動を開始出来たら、みんな納得のいくプログラムを作れるかと。他の活動なども入って来ると思うので、厳しい部分もあると思いますが、検討していただけると嬉しいです。(中2・男子) / 開催してくださりありがとうございます。お兄さんに優しく教えてもらえ、きっとお互いにとって学び多い時間になると思います。(40代・女性) / 最終目標の設定があるとやる気が出ると思った。でも第1回目の内容はさわれるようになるだけで十分頭いっぱいでした。(40代・女性)

大会参加実績

2017

旭川市科学館サイパル 7 名

2018

イオンホール(旭川) 9 名

2019

イオンホール(旭川) 4 名

2020

オンライン開催 6 名

2021

オンライン開催 8 名



特別ワークショップ 気候変動に向き合う

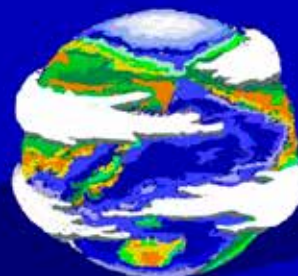
特別ワークショップⅠ 2021年10月25日

最先端に出会う *東大・中高生オンラインセミナー

気候変動と社会の未来

～わたしたちにできることをともに考える～

「気候変動と社会の未来～わたしたちにできることをともに考える～」オンライン特別ワークショップとしてふらのみらいらばから小中学生3名、大人18名が参加しました。主催は東京大学大学院教育学研究科 社会教育学・生涯学習論研究室。ゲストの(株)豊田中央研究所の最先端の技術者たちに、中高生とは思えないほど高い認識からの専門的な質問がつぎつぎと飛び出しました。最先端技術を研究する際の姿勢、小中高生時代の学びのコツなど、優しく丁寧な回答がありました。可能であれば対面でのセミナーで深いやり取りを望むところではありましたが、遠くに離れた小中学生が一堂に会するオンライン活用の利点をあらためて認識しました。「ギャラリー」として大人たちも多数参加、小中学生と「まぜて、まなぶ」を実践しました。このセミナーをふまえて、多世代による特別ワークショップⅡへと形を進化させます。私たちの地域においての「気候変動～今、わたしたちにできること～」をもっと、多世代で声に出そう！と士気が高まりました。



特別ワークショップⅡ 2021年11月7日

もっと、もっとみんなで話そうよ！

気候変動と社会の未来

～わたしたちにできることは？～

当日、コロナ対策を気遣いながら対面でのワークショップ開催は、小学生を含む多世代13名が参加しました。オンラインとは違う生のつながりをあらためて肌で感じとることができました。声と声、ことばとことばの行き交いは、熱い思いがまざり、重なり、対話がぐんと深まりました。

例えば、「今年はトンボが少なかった。」「雪虫の様子がいつもと違う。」「雨が少なくひまわりの芽生えが遅かった。」など。

身近な虫や花、小鳥や校庭の樹、食卓の野菜や果物にとって「気候変動」はどのような影響があるのだろう。小さな生きものたちの気持ちになって「気候変動」を見続けること。これがわたしたちにできること。

私たちは《アレヤコレヤ》話すが、まだまだ足りないんじゃない？ どんどん深掘りして、そのひらめきや感動を絵画や写真・造形で表現し、広く思いを伝えてみるのはどうかな？

2022年、次年度ふらのみらいらば活動の道筋がぼんやり見えてきました。

ふらのみらいらぼ年表

年	プログラム	内容
2016	ふらのみらいらぼ オリエンテーション	多世代が対等な立場で学び合う4つのワークショップ・プログラムを紹介。みんなで夢を持ち寄り、「らんたん」を掲げるイベントを開催。「つくる」「れんらく」「じっこう」の3チームに分かれて準備を進め、厳冬の1月に富良野緑峰高等学校のグラウンドにおいて、総勢250名を超える参加者が集い、夕空に思い思いの願いを込めた150基の「らんたん」を揚げた。
	まちをつくろう ふらのゆめらんたん	自分の「daisuki」を探す、A4サイズのジオラマ・ワークショップ。巨大ジオラマにつなぐ。
	空から鳥になって ふらの知ろう	地産の粉から餃子の皮で3種の具を詰め食べ比べなど、「みんなで作って、一緒に食べる」を大切に、富良野産食材を使った料理に挑戦。
	見て、作って、食べて 美味しいを探そう	はたらく人、しごとを知るきっかけづくり。入籍直後のご夫妻に向けてのウェディング・プランニング。役割分担を行い準備を進めて、2月には文化会館大ホールにて「ふらのみらいらぼ presents HAPPY WEDDING」を開催した。参加者は約380名。芝居あり、歌あり、踊りあり、想いがいっぱい舞台演出は、温かい拍手と笑顔に包まれて幕を下ろした。
	はたらく人になって ウェディングプランナー	東京大学大学院教育学研究科体験活動プログラム2016「文化ワークショップを基本とした過疎・高齢地区のまちづくり体験プログラム」参加の4名と文字通りまぜて、まなぶ。
	東京大学体験活動プログラム	私達の活動が広く市民に周知できる機会として作品展示。
	富良野市民総合文化祭	オリエンテーションから半年後、4つのプログラムの進捗状況を共有、プログラムを超えて協力し合うきっかけづくり。
	ギャザリングパーティ・ワークショップ	
2017	見て、作って、食べて 美味しいを探そう	「見て、作って、食べて」を繰り返す。地産の粉から餃子の皮づくり。多彩な持寄り食材がタネ、美味しいものが見つかった。
	はたらく人になって ICT エンジニア	初歩的なプログラミングに触れる。旭川で開催される「U-16 プログラミングコンテスト」参加に向け、活動開始。「プログラミングって何？」から始まり簡単なコード書きに挑戦。
	空から鳥になって ふらの知ろう	高齢者大学（ことぶき大学）で実践。A4サイズのジオラマづくりを通し先輩方の富良野への思いを知る。古布や紙の切れ端を使って自由に伸びやかに。進め方、仕上がりは十人十色。
	富良野市民総合文化祭	私達の活動が広く市民に周知できる機会として作品展示。
	サウンズ&ムービーズ ふらのを伝える	コミュニティFMと防災について、スタジオ見学と放送のしくみ、番組づくりに必要な「コト」と「モノ」を知り、みんなが聴きたい番組を考える。そして、作りたい番組をイメージして、収録・制作するラジオ局体験プログラム。
2018	はたらく人になって ICT エンジニア	あらためてふらのにはどんな会社があって、どんな仕事をしているかを大人も子どもと一緒にまなぶ。身近な存在の遮断器や押ボタン信号機システム製作の電子工作に、ICT エンジニアを目指してチャレンジ。富良野緑峰高校生が講師役を担った。11月には「U-16 プログラミングコンテスト」にも参加。
	麻・まち・アート 白い服プロジェクト	富良野市「麻町」の歴史を紐解きながら、白い麻布で自分の服を手縫いし、昔の人々の記憶とつながり思いを馳せる。縫い上げた服をまとって写真におさめ、作品展に仕上げるワークショップ。
	富良野市民総合文化祭	私達の活動が広く市民に周知できる機会として作品展示。
	大学院生 特別ワークショップ	テーマ：「ひそひとふつ〜ミクロな世界へご招待」中山 宗一郎講師
	サウンズ&ムービーズ ふらのを伝える	テーマ：「味と匂いから見る豊かな世界」藤林 駿佑講師
	見て、作って、食べて 美味しいを探そう	声楽家とピアニストを講師に迎え、市内歌声サークルと少年少女合唱団メンバーが一同に童謡や唱歌を歌うワークショップ。その歌声を後日ラジオ放送。来訪中の大学生たちと、幼稚園児からシニアまで、事前に献立を作らない「お膳立てのない料理」を実施他。

年	プログラム	内容
2019	森・ひと・アート 緑の緑プロジェクト	森に分け入り、ひらめきや感動をアート作品に仕上げる。富良野の森の成りたちや歴史について学習した後、写真・造形・絵画の3班に分かれ活動をスタート。数か月にわたる活動企画に挑戦。初めての体験にとまどいながらも、市街地を縁どる森の存在をあらためて認識。
	富良野市民総合文化祭	私達の活動が広く市民に周知できる機会として作品展示。
	はたらく人になって ICT エンジニア	マイコン Arduino を使用したプログラミング電子工作に挑戦。テーマは「停留所に近づくバスの再現」。高校生が講師役となり、小中学生をリードする形態に進化。11月には「U-16 プログラミングコンテスト」にも参加。
	特別ワークショップ (哲学)	「多世代でまざる」を哲学。テーマが四方八方に散らばって、時には笑い、沈黙し、粘って話し合う。考えるレッスンで他者の発言に真剣に向き合った90分。
	見て、作って、食べて 美味しいを探そう	畑のかぼちゃにフォーカス。育て方、品種、採り頃の見分け方などの指導を受け収穫体験。大地の恵みに感謝しながら、かぼちゃの食べ比べや、かぼちゃをモチーフにした版画制作にもチャレンジ。
	サウンズ&ムービーズ ふらのを伝える	ラジオふらの設立者のお一人を講師に迎え、「ラジオってなに？どんな時役立つの？」「マイクの前での心構え」や番組作りのポイントなどを学習。続いてスタジオで実際に収録練習を行い、番組制作も体験した。
2020	はたらく人になって グラフィックデザイナー	ふらのみらいらぼ参加募集のチラシデザインをみんなで作成。チラシとは何か、何を伝えるかななどをディスカッションした後、構成、色彩、キャッチコピーなど、参加者それぞれ提案の一つのデザインにまとめた。
	川・ひと・アート 水の世界	コロナ感染予防のため、ビデオ会議アプリを使って双方向に情報交換を行うメディア・ワークショップに挑戦。市内をはじめ、旭川、遠くは東京・京都からも参加、30名程のメンバーがつながった。市内を流れる空知川がどこで生まれて、どこへ行くのか、「川」を知って、流れを肌で感じて、その時の気づきやひらめきを、前年の「森」に続きアート作品展に仕上げた。
2021	はたらく人になって ICT エンジニア	オンライン「U-16 プログラミングコンテスト」に向け少人数制で進めたワークショップ。「密」を避けながらも互いに声を掛け合い切磋琢磨。高校生から中学生へ、中学生から小学生へと、プログラミング技術が引き継がれていく。
	土・ひと・アート 大地見聞	本年度もコロナ感染予防のため、ビデオ会議アプリを使って双方向に情報交換を行うメディア・ワークショップでスタート。足元の「土」、野山の「土」、田や畑の「土」、身近な富良野の「土」を知って、その時のひらめきや感動を「写真」や「絵画」などで表現。アート作品展に仕上げた。
	はたらく人になって ICT エンジニア	5回目の参加となる「U-16 プログラミングコンテスト」に向け少人数制のワークショップを開催。また、これまでパソコンに触れたことのない小学校低学年対象に初級者レベルのワークショップも開催。「密」を避けながら、中学生メンバーのサポートにより、小学生に技術が引き継がれていく。
	特別ワークショップ (環境)	「最先端に出会う〜東大・中高生オンラインセミナー」に参加。テーマは「気候変動と社会の未来〜わたしたちにできることを考える〜」。気候変動について考え、対話し続けることが大切だと認識し、今後もワークショップを継続予定。

広報活動 (ラジオ放送)	地域の方々へ私たちの活動の様子をお知らせすることを目的に、プログラム「土・ひと・アート 大地見聞」ワークショップの模様、感想などを盛り込んだラジオ番組を制作し、3回にわたって放送した。
--------------	--



作品展に向けて作ったオリジナル看板



3チームに分かれて「○」「△」「□」の「土」掘り体験



写生会を行った「おさだ高原農場」にて

おわりに

年齢や立場を越えて仲間が集い同じ時間を共有する私たちのワークショップは、いつも新鮮な驚きや発見があります。昨年に続き今年もコロナ禍ということで、感染症対策をしながら制限のある活動ではありましたが、新たなチャレンジもあり無事に作品展も行うことができました。

このような体験を積み重ねることで生まれる小さなつながりが、富良野の「まちづくり」への良いきっかけになることを願っています。6年という時の流れと共にワークショップの形やメンバー構成は変化していますが、ゆるやかなつながりを大切に、これからも交流の場を生み出していきたいと思えます。

みなさんも「まぜて、まなぶ」ワークショップと一緒に作ってみませんか？
たくさんのご参加をお待ちしております。

ふらのみらいらぼ ふりかえり帖 2021

発行日 2022年(令和4年)2月
 編・刊 一般社団法人 富良野デザイン会議 暮らしステーション
 ふらのみらいらぼ
 〒076-0011 富良野市末広町18番5号
 電話・FAX : 0167-23-4000
 電子メール : kurashi@agate.plala.or.jp
 編集者 山岸 千恵・佐藤 直美・浦田 芳穂
 イラスト 大石 春夫

本書の発行は、富良野市「ふらのまちづくり未来ラボ推進事業」の成果品の一部です。